雪の小鈴

土屋文明の歌と植物

入江真知子編

海鳥社

雪の小鈴

土屋文明の歌と植物

入江真知子編

海鳥社

入江真知子（いりえ・まちこ）　福岡県中間市生まれ．昭和35年，文部省図書館職員養成所卒業．福岡県立修猷館高等学校図書館を経て，現在，福岡県立図書館に勤務．アララギ会員．福岡市在住．

雪の小鈴　土屋文明の歌と植物

■

1991年8月10日発行

■

編者　入江真知子

発行者　西　俊明

発行所　有限会社海鳥社

〒810 福岡市中央区大手門3丁目11番27号

電話 092(771)0132　振替 福岡9-40696

印刷　九州コンピュータ印刷株式会社

製本　平田製本株式会社

ISBN 4-906234-97-6

［定価は表紙カバーに表示］

序に代えて

この度、入江真知子さんが『土屋文明歌集』（角川文庫版）より植物名の明らかに出ている歌をすべて抜き出し、植物名ごとに分類し、『雪の小鈴』の書名で出版することになった。

土屋文明（敬称略）といえば、誰しもまずその植物詠を思うであろう。だが、一概に植物詠とはいっても、詠まれている植物が多種に及んでいるだけでなく、感動も多様であって、その特徴を簡単に定義することは難しい。中には「人間であることを守ろうとした一つの生き方」と見る人もあり、また「弱い正しい庶民の人間苦に対する彼の深い愛情と類を同じくするもの」ととる人もあって、受容はさまざまであるが、どういう見方を選ぶにしても、まず作品そのものを先入観を捨てて、繰り返し繰り返し読んだ上でなすべきであろう。

いま試みに本冊子より目につくままに数首を抜き出し、項目を立てて整理してみた。ある時は思慕、ある時は義憤が、またある時は底ごもるように人生への詠歎が歌われていて、三十一音という短歌形式が、古代より現代に至るまで脈々と歌い継がれてきた所以がしみじみと思われる。更にまた、嘗て作者が「伊藤左千夫」と題しての講演で『万葉集』を「自然についてもまた人間についても非常に直接な表現をしている文学である」と言い、それにより左千夫が

「自然及び人生の奥所に至りえたのではないか」、「自然に人間に直結するということで万葉から近代に結びつき得たということが言えるのではないか」と言っているのも、言い換えれば、人生は勿論、植物に対しても「もののあはれ」的な情趣でなく、直接に「あはれ」を感ずることが近代短歌のこれからのあり方だということであろう。文明の植物の歌もそういう観方で向かえば一段と深い感動を覚えるであろう。

a　万葉集　伊藤左千夫

1　赤目柏終の黄葉のにほふ葉を吾はなげかむゆづる葉の下に
（ゆづる葉に寄せにし人の嘆さへ今日のあしたに思ふかなしも）

2　雷の丘の竹村くぬぎ林静かなる秋のひるすぎにして

3　豊国の鏡の山を恋ひ来つつ芹青き川いくつかわたる

4　葵藿の葵をヒマハリとする博士等がまだ絶えないのも仕方がない

5　白き栗食ふことは憶良の世にもありきやそれとも九月三日熟するありきや

b　食

1　甘草も未だ飽かぬに挙り立つ浅葱の萌えいづれを食はむ

2　幾いろか蒔きにし種子はなりいでず今日は収めむ青紫蘇の実を

3　外国米に芋混ずる故里の炊ぎ方吾が子供は二三日にして止む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4　足悪き君がつとめて掘りたびし伊予の山芋今宵すらしむ
5　われとわが妻とささやかに食ふなればしとぎ若芽も開きはてたり

c　自然詠

1　たちまちに回り終へて島のみなみがは光の中に葦は冬がるる
2　紅に匂ふ馬酔木の一木ありあはあはと匂ふその紅や
3　にんじんは明日蒔けばよし帰らむよ東一華の花も閉ざしぬ
4　磚の間に生えたる草は何々ぞ檜扇あやめ未だ花咲かず
5　さわぎ行く電車道より入り来り楠の木ずゑの夕しづむ音

入江さんは三十年近く作歌を続けてきた人である。だが三十年の歌歴はそれほど重いものではない。文明の植物詠を分類し熟読することによって新しい展開を求めようとしているのであろう。

この小冊子は、一人の女性が独力で、勤めを終えて帰ってきた夜の灯の下で、三千数百首の歌を一首一首書き抜き、植物名ごとに分類したもので、途中ではどんな植物かも分らず、時には植物であるかどうかさえ判断できず、書庫に入り、人に問い、迷い迷い、心にかかって眠られぬ夜をいく夜か重ねながら、数年かかってようやく一冊にまとめたものである。

稿成って私に序を書けという。そもそも入江さんを歌の道に入らせたのが私であり、分類作

業中しばしば苦言を呈し、また長い年月の苦労をも知っているからであろう。已むなく引き受けはしたが、序などということごとしいものを書く積りは始めから無かった。ただ此の一冊を読んでもらう手がかりになるようなものが書けたらいいと思っていた。一人でも多くの人に読んでもらい文明短歌理解の一助ともなることを祈って筆を擱く。

牧野正利

凡例

一、『土屋文明歌集』（角川文庫、昭和四十六年版）を底本とした。

二、歌の中に詠みこまれている植物名を見出し語とし、その五十音順の配列の下に、それぞれの植物が詠いこまれている歌を集め、頁数の順に配列した。但し、学名（ラテン語）で表現されているものは、日本語見出しの最後に並べた。なお、内容は植物を詠ったものであっても、植物名が明記されていないもの、また総称としての「草」、「木」、「花」、「菜」などの言葉で表現されているものは割愛した。

三、植物固有の名前ではないが、「かづら」、「しもと（楛、楚樹）」、「フロラ」などは関連するものとして収めた。

四、歌の表記はすべて底本のままとした。但し、明白な誤植は訂正した。補注の引用文、引用歌は原文のままとしたが、漢字はすべて現在通用のものに改めた。

五、同じ植物でいくつかの名前や読み方のあるもの、また種類が細かく分かれていたり、花の色などによる区別があるものは、参照記号⇓、＊で案内した。

［例］櫨（はじ）⇓櫨（はぜ）
苺（いちご）　＊木苺（きいちご）

六、最下段に底本の頁数及び歌集名（略記）を記した。略記は以下の通り。

放水路
ふゆくさ……ふゆ
往還集……往還
山谷集……山谷
ゆづる葉の下
六月風……六月
少安集……少安
山の間の霧
山の間の霧……山の
韮菁集……韮菁
山下水……山下
自流泉……自流
青南集……青南
続青南集……続青

七、『土屋文明歌集』（昭和四十六年版）に収められている歌集は前記の通りである。従って、各歌の下の頁数によって角川文庫へ、さらにそれぞれの歌集へとたどっていくことが出来る。また、未来短歌会編『土屋文明論考』の資料「土屋文明全歌集初二句索引」を合せ使えば、直接それぞれの歌集に至ることが出来、その作品を含む連作の全貌を知ることが出来る。

八、植物の見出し語の総数は四三〇で、その見出し語の下に並べた歌の総数は一二七二首である。但し、この歌の総数には、一首の中に複数の植物名が詠いこまれている場合の重複分が含まれている。

目次

序に代えて　牧野正利
凡例

あ……3　い……11　う……17　え……20　お……22
か……24　き……33　く……38　け……45　こ……47
さ……54　し……60　す……69　せ……76　そ……78
た……80　ち……89　つ……92　て……96　と……98
な……101　に……105　ぬ……108　ね……109　の……111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は……113
ひ……124
ふ……128
へ……135
ほ……136
ま……140
み……149
む……152
め……155
も……156
や……158
ゆ……165
よ……168
ら……170
り……172
れ……174
わ……175
ゐ……179
ゑ……180
を……182
補注……185
出典及び参考文献……219
後記……223

雪の小鈴

土屋文明の歌と植物

あ

アイスランド雛芥子　なよなよと吹かれて白き花片に少し色匂ふアイスランド雛芥子　一六九（少安）

赤花クロバ　牧草を畦の如くに刈り伏せぬ残れるところ赤花クロバーにチモシ草秀づ　八七（山谷）

赤松　秋近き風とかも言はむ今日の午後赤松山の幹が目に立つ　二七（往還）

赤松の幹に雨ふる親しさよ日本より長くしてなびく松の葉　三三（韮菁）

赤目柏　赤目柏終の黄葉のにほふ葉を吾はなげかむゆづる葉の下に　一三三（六月）

麻

生々しき苅りたる麻をになひ来つ麻の香ただよふ真昼間の時　一九〇（山の）

川原あり煙を立てて麻を煮る栗の木蔭に人はやすめり　一九〇（山の）

浅葱

冴えかへる夕の町に浅葱の並べる見れば和む思ひあり　三九（往還）

あさつきはすでに黄ばめる草はらに散れる桜の花をながめつ　四五（往還）

限りなき浅葱の類あをしあをし土にむらがり立てるいきほひ　一八六（山の）

甘草も未だ飽かぬに挙り立つ浅葱の萌えいづれを食はむ　二三〇（山下）

地につきて白き古葉のすがしきにこぞり萌え立つ浅葱の芽ぞ　二三〇（山下）

青くなる真間より韮を拾ひつつのびし浅葱は今日かへりみず　二三〇（山下）

わが庭に植ゑたる葷きもの六種韮にんにく分葱浅葱葱玉葱　二四四（山下）

浅葱の秋の茂りを踏みて上る遠き白根のけむり見るべく　二四九（山下）

たづさへて山より帰り来し二年あさつきは唯一度のみ食ふ　二九一（青南）

浅葱の枯れて野びるはかじかまり吾が腰抜ける二月近づく　三〇三（青南）

あさつきの長けたる土も心がなし盛りて平にならむ年月　三一〇（青南）

薊

大きなる薊も時に心ひくあまねく短き草原にして　二〇三（韮菁）

いづみには早く萌えたるあざみあり明日の日食はむ吾が青きもの　二六一（自流）

葦

たちまちに回り終へて島のみなみがは光の中に葦は冬がるる　六七（山谷）

枯葦の中に直ちに入り来り汽船は今し速力おとす　七〇（山谷）

船体の振動見えて汽笛鳴らす貨物船は枯葦の原中にして　七〇（山谷）

たくましき大葉ぎしぎし萌えそろふ葦原に石炭殻の道を作れり　七〇（山谷）

二三尺葦原中に枯れ立てる犬蓼の幹にふる春の雨　七〇（山谷）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com